KG+

flow / float

大洲大作
Oozu Daisaku

2023年
4月15日[土]— 5月14日[日]
13時から19時まで　水・木休廊／入場無料

協力：堀内カラー

川の街に生まれた。

いつか幾つもの川を渡り、光と影がうつり交わる水面を見ていた。

淀川、堂島川、土佐堀川。

鴨川、高瀬川、琵琶湖疏水。大田川。

多摩川、大岡川。

親しんだ街も時とともにうつろう今ひとたび、人をわかち、あるいは結んで流れる川それぞれの水面を見つめ、ゆれる光に街をうつしてみる。

大洲大作

https://www.oozu.info

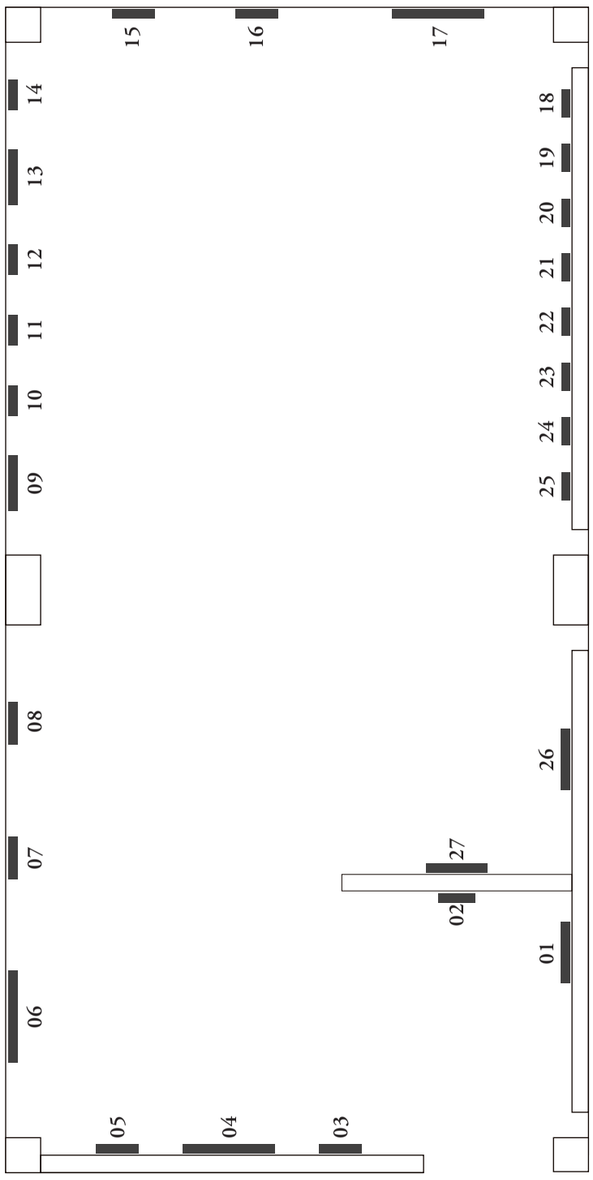
1973　大阪に生まれる
1994〜95　大阪国際写真センター（現 IMGローバル映像大学）にて学ぶ
1997　龍谷大学文学部 哲学科を卒業

2023　第26回 岡本太郎現代芸術賞展"TARO賞"（川崎市岡本太郎美術館・神奈川）
2022　個展「大洲大作 Logistics / Rotations」（蒲田駅東口周辺・東京）
- 六甲ミーツ・アート 芸術散歩2022（六甲山アートセンター・兵庫）
- 個展「flow / float」（SAI GALLERY・大阪）
- 個展「Loop Line」（eitoeiko・東京）
2020〜21　個展「黒い窓」（象の鼻テラス・神奈川）
2020　「富士の山エンナーレ2020」（富士市・静岡）
2019　「大洲大作 未完の螺旋」（京成電鉄 旧・博物館動物園駅・東京）
2018　「めかねと旅する美術展」（青森県立美術館・青森、島根県立石見美術館・島根、静岡県立美術館・静岡）
- 「第5回 ホテル山と エンナーレ」（ホテル山上 & Midori Art Center・青森）
- 「まちなかエンナーレ×アートラボあいち site & art 02 窓から。」（アートラボあいち・愛知）
- 「それぞれのリアル」（あまらぶアートラボ・兵庫）
- 「Another Tokyo」（スパイラル・東京）
- 個展「・ ｜」（Little Barrel Project Room・東京）
2017　「ラフラフシュー2」（青森県立美術館・青森）
- 「第4回 ホテル山と エンナーレ」（ホテル山上 & Midori Art Center・青森）
- 「写真＋列車＝映画　市川平 大洲大作 瀬尾俊三」（カマタ_ソーコ・東京）
- 「石の街つつのみや ／ 個展 大洲大作・写真の仕事 ｜ 石の街」（宇都宮美術館・栃木）
2016　「さいたまトリエンナーレ2016」（旧埼玉県立民俗文化センター・埼玉）
- 「不在の選挙」（float・東京）
- 「High-light scene」（Gallery PARC・京都）
- 個展「Afterglow」（POETIC SCAPE・東京）
2015　「Fly me to the AOMORI 青い森へ運れてって」（青森県立美術館 館外企画／愛知）
- 「光路」（ナイギャラリー・大阪）
2014　「第3回 ホテル山と エンナーレ」（ホテル山上 & Midori Art Center・青森）
- 個展「大洲大作 光のシークエンス」（Gallery PARC・京都）
2013　個展「PANORAMIC WINDOW ／ 光のシークエンス」（ナイギャラリー・大阪）
2012　「始発電車を待ちながら」（東京スチーションギャラリー・東京）
- 個展「INVISIBLESCAPES」（galerie son・ベルリン／ドイツ）
2010　個展「光のシークエンス」（space B・京都）
2009　「Spiral Independent Creators Festival」（スパイラル・東京）
2008　個展「Illusions of the Sea」（galerie magenta・ベルリン／ドイツ）
2007　「Junge Kunst」（galerie son・ベルリン／ドイツ）
1999　個展「NO MAN'S LAND」（The Third Gallery Aya・大阪）
1996　個展「浸透圧」（The Third Gallery Aya・大阪）

［関連イベント］
スペシャルトーク
Born by the River
佐藤守弘［同志社大学文学部教授］
×
大洲大作［美術家］

5月14日［日］※本展最終日 19時より（90分予定）
参加無料／予約不要

Gallery PARC
GRAND MARBLE



01 flow / float
堂島川（田蓑橋付近 #3）
Dojima River (near Tamino-bashi Bridge #3)
二〇二三　ラムダプリント　一〇五〇×七〇〇㎜

02 flow / float
堂島川（田蓑橋付近 #1）
Dojima River (near Tamino-bashi Bridge #1)
二〇二三　インクジェットプリント　四五〇×三〇〇㎜

03 flow / float
有栖川（斉宮橋付近）
Arisu River (near Saigu-bashi Bridge)
二〇二三　ラムダプリント　六〇〇×四〇〇㎜

04 flow / float
宝ケ池
Takaragaike
二〇二三　ラムダプリント　一六五〇×一一〇〇㎜

05 flow / float
鴨川（七条大橋付近 #1）
Kamo River (near Shichijo Bridge #1)
二〇二三　ラムダプリント　六〇〇×四〇〇㎜

06 flow / float
琵琶湖疏水（墨染橋付近 #1）
Lake Biwa Canal (near Sumizome-bashi Bridge #1)
二〇二三　ラムダプリント　一六五〇×一一〇〇㎜

07 flow / float
琵琶湖疏水（墨染橋付近 #2）
Lake Biwa Canal (near Sumizome-bashi Bridge #2)
二〇二三　ラムダプリント　六〇〇×四〇〇㎜

08 flow / float
濠川（伏見制水門付近）
Hori River (near Fushimi-seisuimon Watergate)
二〇二三　ラムダプリント　六〇〇×四〇〇㎜

09 flow / float
大岡川（長者橋付近 #1）
Ōoka River (near Chojya-bashi Bridge #1)
二〇二三　ラムダプリント　八一〇×五四〇㎜

10 flow / float
大岡川（山王橋付近）
Ōoka River (near Sanno-bashi Bridge)
二〇二三　ラムダプリント　四八〇×三二〇㎜

11 flow / float
中村川（睦橋付近 #2）
Nakamura River (near Mutsumi-bashi Bridge #2)
二〇二三　ラムダプリント　四八〇×三二〇㎜

12 flow / float
大岡川（長者橋付近 #2）
Ōoka River (near Chojya-bashi Bridge #2)
二〇二三　ラムダプリント　四八〇×三二〇㎜

13 flow / float
中村川（睦橋付近 #1）
Nakamura River (near Mutsumi-bashi Bridge #1)
二〇二三　ラムダプリント　八一〇×五四〇㎜

14 flow / float
大岡川（長者橋付近 #3）
Ōoka River (near Chojya-bashi Bridge #3)
二〇二三　ラムダプリント　四八〇×三二〇㎜

15 flow / float
京橋川（比治山橋付近）
Kyobashi River (near Hijiyama-bashi Bridge)
二〇二三　ラムダプリント　六〇〇×四〇〇㎜

16 flow / float
京橋川（御幸橋付近）
Kyobashi River (near Miyuki-bashi Bridge)
二〇二三　ラムダプリント　六〇〇×四〇〇㎜

17 flow / float
広島城内堀（中国軍管区司令部防空作戦室付近）
Hiroshima Castle moat (near former Chugoku Regional Military Headquarter's Air Defense Room)
二〇二三　ラムダプリント　一六五〇×一一〇〇㎜

18〜25 flow / float
疏水分線 #1〜#8
Lake Biwa Canal branch #1〜#8
二〇二三　ラムダプリント　四五〇×三〇〇㎜

26 flow / float
糺の森（瀬見の小川 #1）
Tadasu no Mori (Semi no Ogawa #1)
二〇二三　インクジェットプリント　七二八×五二五㎜

27 flow / float
糺の森（瀬見の小川 #2）
Tadasu no Mori (Semi no Ogawa #2)
二〇二三　インクジェットプリント　七二八×五二五㎜

interview
大洲大作

―― これまでの取り組みや作品「光のシークエンス」シリーズについて教えてください。

おそらく、「何かが何かにうつる」ということに興味があるんです。「光のシークエンス」という作品は、列車の車窓に写っている光を追っている作品です。「車窓」というと窓の向こう側にある景色を思い浮かべるかもしれませんが、窓というレイヤーが自分にとっては大事なんです。だからメインで扱っている作品は、窓そのものにピントがあっている。ガラスに何かが映っていたり、雪が降ったり雨がふったり、その水滴が付いているところに光が当たっている。その様子を撮っているのが「光のシークエンス」というシリーズです。

列車の外側にある雰囲気なり風土というものを、車窓に写るものとして描き出しているといえます。２００７年頃から撮り始めて、現在も引き続き撮り続けています。

最近の「光のシークエンス」はインスタレーションが主になっています。写真とはちょっとアウトプットが違うように見えるかもしれませんが、基本は写真であって。それに時間軸を与えて映像にしていたり、以前パルクでおこなった展示（２０１４年）のように、何枚もの写真を空間の中にレイヤー状に並べて体験してもらったり。「光のシークエンス」のシリーズだと、車窓の1コマじゃなくてその前後も見せたい、という思いがあるので、前と後ろの時間軸を与えています。

―― 今回はストレートに写真、プリントのみの構成になっています。

これは逆説的な話だけど、「光のシークエンス」でも、結局のところ前後を扱ってるけど、一番視覚的に喜びがあるのは最終的にはやっぱり一コマのはずなんですね。だから、それを選び取るっていうのが写真のひとつでもあるわけで。

写真って基本的には見えているものしか描くことができないから、まず、何を被写体に見るのか、どんな構図を選ぶのか、どのタイミングでシャッターを切るのかで全部決まるわけですよね。そういう言ってみれば不自由な写真のありかた、ストレートなあり方っていうのは、写真というメディウムの特性をとてもよく表すものだと思うので、それは大事にしたい、そのことについて考えたいと思うんですね。だから時々それに立ち返って制作をしたいなと思って。

今回の「flow / float」はその位置にあるかなと思うんです。特に車窓以上に、川とか水面とかって、移り変わりが本当に激しくて、1分後でも違うものになる。同じ季節に、同じ時間に来たとしても同じ写真が撮れることはまずない。列車の車窓だったらまだ、次の日に同じ場所に行ったら近いものは撮れるかもしれないけど、そういうことはないんですよね。それがすごくおもしろい。

―― 「flow / float」シリーズについて

今回パルクで展示している「flow / float」シリーズも、やはり「何かが何かにうつってるもの」で、具体的には水面にその周りの風景であったり空であったり、周りを取り囲んでる建物や自然が写っているというものです。

２０２１年に取り組んだコミッションワークをきっかけとして始めた新シリーズなのですが、納品先が大阪の堂島にある旧・東洋紡ビルで、目の前に堂島川という大きな川が流れていたことから、まず初めに川を撮ってみようと思ったんです。大阪という街は、「八百八橋」と言われるように、水や川に特徴づけられる街なので、川を撮ることで「大阪」を映し出すことはできないかと考えて制作を始めました。

大阪は自分が生まれた街であり、毎日、淀川、堂島川、土佐堀川・・・といくつもの川を越えていくのが日常でした。街並み、あるいは堂島のビルそのものを撮らなくても、川面に写っているものだけを追うことで、大阪という街や風土を表すことができるんじゃないか、と考えました。

【01】-【02】

最初のうちは水面に限らず、橋や街が写り込むものも撮ってみたのですが、途中からそんなに説明的なことをしなくても、アブストラクトとして水面だけでも画面を構成できるし、その方が面白いと気づいて、水面ばかり撮りだしたということになります。

そうすると、大阪以外にも広げていくことができるなと思ったのですが、では、どこでやろうかと考えた時に、まずは水面があんまりないところではできない。そうなると行ったことがあるとか住んだことがあるような、よく知っている土地から候補を出して、絞っていくことにしました。

京都には、住んだことはありませんが、学生時代、伏見にある龍谷大学に通っていたので良く知っていました。鴨川を中心に上がったり下がったり、ということが多かったですね。深草キャンパスだったので、鴨川以上に、横を流れてる疏水が自分にとって親しみ深いものだったんですね。

上流の方へ行くと、国立近代美術館だったり京都市美術館だったり、アートスペース虹さんだったり、馴染みのある場所が多いです。

宝ヶ池とか下鴨神社（糺の森）については、ゆかりのある場所というよりは、自分の好きな場所、京都という街をなるべく満遍なく撮りたいなと思って。それは伏見だけじゃなくて、北の方であれば糺の森は撮りたいなぁと。それと西の方の有栖川を今回は撮りに行きました。

【03】-【04】-【05】-【06】-【07】-【08】

16・17《flow / float - 琵琶湖疏水》が、琵琶湖疏水の伏見の方に行く本流なんですけど、これは疏水分線というもので、南禅寺のところに入って行く、いわゆる水路閣、有名な水路橋に流れていく途中で撮影しています。ここは水路の幅が細くなっていくので、すごく流れが激しいんですね。南禅寺と東山の間で木が鬱蒼と茂っていて薄暗くなっているのですが、木々の間から陽が差していて。白い波頭があるところに、それとは別の木漏れ日のハイライトが踊っているというのが面白いなと思いました。

京都という街は水の事情がすごく悪くて、そのために琵琶湖から水を引く疏水をつくって、水事情と電力事情も解決しようとしたんですね。だから疏水分線のところには発電所もあって、そこがある程度流れが速い所であったりする。それがすごく疏水そのものの機能をよく表している場所だなと思って、そのまま捉えてみようと。水の流れが激しくてあっという間に姿を変えていくので、何十枚も撮影した中から8枚を選んで、その移り変わりを見てもらえたらなと。

【18】~【25】

―― ちょっと変わった構造を持つ作品もあります。

《flow / float - 糺の森》ですね。これは6月ぐらいの撮影で、ちょうど夏になっていく、暑くなっていくときの写真です。糺の森の真ん中なので木々が覆っている。水の流れは穏やかなんですけど、その穏やかな流れのなかに枝の姿が写り込んでいます。2枚あって1枚は木々の枝だけが写っているんですけど、もうひとつは水面を渡っている昆虫も入っています。撮影していると、川の流れとは別に波紋があるなと思って、よく見たらぴょんぴょん飛んでいる。それで、その姿も撮ってみたというもの。

この瀬見の小川、実は近年に復元された流れです。糺の森も元は原生林ながら、人が手を入れ、利用し、また保ってもきた場所なのですね。

【26】-【27】

この2点は白い印画紙じゃなくて、透明フィルムにプリントして額縁に入れているので、写っているモチーフである枝とかあめんぼだとかの影が壁面に写っています。この方法で展示するのは初めてなのですが、これまでの作品で取り組んできたことと関係しています。

例えば、「光のシークエンス」のシリーズでは、本物の列車の窓そのものを持ってきて、その窓をスクリーンとして映像（時間軸を加えた写真）を映し出す、ということをしています。それはなぜかというと、実際ガラス越しに見ている、自分にとってはガラス越しに見て、ガラス越しに写真を撮っているし、カメラというガラスレンズを介した目で見ているという構造を、見てもらう人にそのままの形で提示したい、と考えたんですね。

今回のこの作品もその考え方に近いところがあって、水面があって、そこに写っているもの、影が落ちているということを擬似的に体験してもらえる方法はないか考えて透明フィルムにプリントしたということですね。だから置く環境によって、照明の位置や強さによって見え方が変わってくる。ギャラリーの空間なのである程度固定されてるけど、少し自然光も入ってくるので、ご覧になる時間帯であったりその日の天候によってきっと違った見え方になるかなと期待しています。

―― 他にもいろんな土地が取材されてます。

たとえばいま住んでいる横浜という街は、いわゆるミナト横浜、川も運河も多いし水路も多いし、新田として開発されたところや舟運そして水道の歴史もあり、そういったことを切り口に撮り始めました。

この周りにある黄金町というところは古くから歓楽街として賑わっていて、現在はアートによるまちづくりがおこなわれている地域です。そのあたりと関内、伊勢佐木町の辺りをぐるっと水路が取り囲んでいる。明治以降に作られた土地で、この両側を流れているのが大岡川ともう一本の川なんですけど、昔はここで船による舟運が行われていたんですね。現在イベントとして、その水路を巡る船が出ているので、その船に乗って撮影しました。

青や赤、紫など、鮮やかな色の部分は、夜のお店のネオンだったりするのですが、原色や怪しげな色あいが、直接川に写りこんでいます。横浜は関西の人からするとエキゾチックな、ハイカラなイメージを持たれることが多いと思うのですが、泥臭く、人の営みが密にあって、いい人も悪い人も住んでいる。そういった息遣いや、綺麗なものも綺麗ではないように思えるものもみんな川に映るような、そういう人の営みが凝縮されているエリア、横浜という街の飾らない一面をよく映しているエリアだなと思います。

【09】~【14】

―― 広島も撮影地になっています。

広島は父方のお墓があって、子供の頃から何度も帰っている場所であり、太田川という大きな川の扇状地の上にできてる街で、川がいくつもあります。その意味で大阪によく似ていると思います。今回の作品は広島市で撮っています。比治山というところがあり、その西側にあるのが京橋川。これが一番東側だとすると、間に元安川があり、旧太田川があり、天満川があり、太田川放水路という大阪でいうと新淀川のような広い川があって、それが市街地の一番西の端になります。

15《flow / float - 京橋川（比治山橋付近）》は、比治山橋という戦前からの橋で撮影したものです。ここは広島の市街地中心部の東にあたり、原爆投下時に被爆しているのですね。原爆が投下されたのは１９４５年8月6日の朝なので、仕事が始まったところで一瞬で亡くなってしまった人が多いですが、一命を取り留めた人たちが、比治山橋を渡って川を越えて逃げていったんですね。

この作品はその比治山橋のたもとから京橋川にレンズを向けてるんですけど、明るい方が陽が当たってる部分、上の濃い部分は橋の影の部分なんです。晴れてる時だったので綺麗に橋の影が落ちていて、くっきりと分かれていて視覚的に面白いなと思って。（原爆が投下された当時）この比治山橋のあたりで水を求めて飛び込んで亡くなった人が大勢いる。橋の上も含めて原爆というものについて考えさせられます。その当時から残っている橋なのでそういった光景が今でも映っているんじゃないかと思った、そういう場所ですね。

16《flow / float - 京橋川（御幸橋付近）》は同じ京橋川にかかる御幸橋で撮影したもの。この橋の上に立ってるオレンジ色の灯りが川面に揺れているところを撮っています。この橋も古い橋で、元は違う名前だったんですが、明治天皇が広島を訪問して、この橋を渡ってから「御幸橋」という名前になったんですね。

市内の中心部ではないにもかかわらず、なぜこの橋を渡ったのかというと、広島って軍隊の街なので、この先に陸軍を見に行く時に渡ったんですね。今でもこの先に被服工場（旧広島陸軍被服支廠倉庫）という軍服を作っていた煉瓦造りの建物が残ってたり、広島が元々軍都であったということを今でも色濃く感じるエリアなんです。

17《flow / float - 広島城内堀（中国軍管区司令部防空作戦室付近）》は、広島城の石垣の上からお堀を撮っている写真なんですが、広島城というのは戦時中、中国軍管区司令部の通信施設があって、学徒動員された女学生の方々も働いていたんです。原爆が投下されたすぐ後に、その通信回線だけが生きていて、「廣島壊滅」という一報を、そこにいた女学生の方が発信をした、というのが広島の原爆の第一報だったと言われています。その半地下の通信施設跡は今でも残っていて、この作品はそのすぐそばの石垣から撮っています。この3つの作品の中では一番、爆心地に近い場所、ということになります。

堀の水は澱んでいて、晴れてる時だと水中の酸素が浮かんできたり、鯉がいっぱいいるんですけど、パクパクして水面が揺れたりして。撮影の時ちょうど、その澱みの加減であったり、雲が急に分厚くなったりして影ができたりっていう空模様が水にうつっていました。

―― 大阪、京都、広島、横浜での「flow / float」の撮影をふりかえって

川や水と関わりのある街であれば、水面を追うことによってその街の営み、その街に住む人の営みを写し撮っていくことができるなと思いました。だから横浜の大岡川や中村川、大阪の堂島川、土佐堀川、その他の木津川や琵琶湖疏水もそうですが、全部運河や水路といった人が営みのために利用して、形を変えてきた川なんですよね。大自然の河川というのはここにはないんですね。

「光のシークエンス」で、車窓を撮ってる作品も、窓に映るものが「人の営為」であるというひとつ大きなものがあるので。自分が撮っているのが車窓であり水面であったとしても、その向こう側にある「人」、あるいは「人の営み」っていうものにやはり興味がありますね。

本紙掲載内容を含む、より詳細なインタヴューは、ギャラリー・パルクのウェブサイトにて公開いたします。

本展に展示された作品は、ギャラリー・パルクのオンラインストアからもご購入いただけます。